

太神宮 あちこち

第9回

度会国御神社・大津神社(上)

神宮禰宜 石垣 仁久

一

ついでに例も見られます。

古い神社の歴史を調べていると撰社や末社など、その神社に所属する社が、すでに失われた過去の扉を開いてくれることがあります。境内の一角にある小さな社でも偶然そこにあるのではなく、そこに祀られるに至った経緯や歴史など、必然性があるのです。

一般に撰社は、本社(本殿)の祭神と血縁関係や主従関係など、鎮座の由来に深く関わることが多くあります。

撰社以外で何かの理由で祀られたのが末社で、例えば火防や雨乞など特定の神徳を頼む機能神、または広範囲に広まった流行神である場合が多々見られます。

中には、撰末社の神の威力の方が勝り、本社に取って代わり元来の本社が末社に転じるケースも稀にあります。また、本社の鎮座以前に祀られていた土地の神が撰末社とな

しかし残念なことに、撰末社は時代の趨勢に追いついて行くことが出来ず廃絶、もしくは現存していても由緒がまったくと判らないことの方が圧倒的に多いのです。

神宮の場合、撰社と末社の分類の原則は、『延喜式』に記載されている社が撰社で、それ以外で『儀式帳』に記載ある神社を末社としています。『延喜式』も『儀式帳』いずれも平安時代初期の記録

ですから、そこに社の名が記載されている神社は、平安時代には存在していたことがわかるのです。(現在の社号と異なる場合も若干あります)

神宮の場合も時代の趨勢によつて、所在が判らなくなつてしまった撰社や末社もありました。今回ご紹介する二社もそうでした。

二
外宮の北御門参道の脇に御

厩があり、そこから西の方へ向かう小径があります。参道とは違つた雰囲気の原生林的な森が広がり、そこを進んで行くと、外宮撰社の度会国御神社と末社の大津神社が鎮座しています。

鎌倉時代に編纂された『倭姫命世記』に度会国御神社は、神武天皇に派遣されて伊勢国を平定した天日別命の子である彦国見賀岐建与束命を崇め祀つたと記されています。

かつては、度会之国都御神社・度会国見神社・国生社・国見社と呼ばれ、それらを総合すると国御と国見は同義であると考えられます。

古代、一定の生活範囲を「国」と称し、山頂などから全体を見渡すことを国見といいました。神や領主が国見をすることで国が平穩に治まるという信仰がありました。

『万葉集』巻一に、舒明天皇が大和の香具山に登つて国見をされた時の御製が載せられています。

天皇の香具山に登りて国を望みたまひし時の御製の歌

大和には 群山あれど たりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし国 そ あきづしま 大和の国 は

この御製は万葉集に収録された四千五百首の中でも二番目に配されています。一番歌が雄略天皇の古詩ですので、この国見歌が実質的な巻頭の歌です。天皇が大和盆地の聖なる香具山に登られ、国をほめることで国土が繁栄する信仰があったからこそ、この歌は意図的に万葉全体の巻頭に配されているのです。

さて社号に冠される度会とは、行政的には度会郡(伊勢市全域・玉城町・度会町・大紀町・南伊勢町及び志摩市の一部・明和町の一部)一帯の地名ですが、

古くはその土地を代表する山の頂上から見渡せる範囲が觀念上の「国」でした。恐らく鷲嶺や朝熊山から見はるかす宮川流域一帯が「度会の国」という感じだったのでしょう。

社号に度会があるので、外宮の祭祀を司っていた度会神

めしたちは、祭神を度会氏の祖と伝承しました。

三

一方、祭神を天日別命の子、彦国見賀岐建与束命とするこゝに、内宮の藪田守良神主は『神宮典略』で、「日別命に功ありとて、其子を崇め祭るべきかは」と疑問を呈し、『倭姫命世記』など外宮の神主が書いたものは、自分たちの先祖を祭神とするなど「偽なる事明かなり」、「ただ己が祖を尊くあらせんとて、かくみだりなる説を云かざれるなり」と断じています。

守良神主がこれほど手厳しく批判するのは理由があり、『延喜式』記載の神社には、かつて朝廷から幣帛が奉られていたからです。度会氏の祖先を祀る私的な神社に対して、朝廷が幣帛を奉るはずがないという観点に立つて、度会神主がいう祭神は間違つていると批判しているのです。その主張の背景には、内宮には、荒木田神主の祖先を祭神とする撰社が一社も存在しないことがありました。

(つづく)